

第12章 ユダヤ人がユダヤ人を殺した「ハーバラ協定」 ——「イスラエル国を解体せよ」と主張する超正統派の ひとびと



超正統派ユダヤ人の集会「我々はシオニストとして生きるよりも、ユダヤ人として死ぬ
ことを選ぶ」

<https://www.972mag.com/haredi-protest-army-conscription-ruling/>

私は今までに、ハワード・ジンやノーム・チョムスキーなどの著作や論考をいくつも翻訳してきましたが、そのとき何時も不思議に思ったことがあります。それは「アメリカを初めとする北米にはなぜロシア系ユダヤ人が多いのか」という疑問でした。

というのは、ユダヤ人が建てたと言われるユダヤの王国は、現在イスラエルが殺戮ころりくの嵐を実行しているパレスチナの地に存在していたとすれば、ユダヤ人そのものは他のアラブ人と同じく褐色人であり、少なくとも肌の色は「白色」ではなかったはずです。

ところが、アメリカやカナダに住むユダヤ人と言われる人たち、たとえば先述のハワード・ジンやノーム・チョムスキーは明らかに白人です。また現在ガザで「民族浄化作戦」を実行しているネタニヤフ首相も白人です。

ウイキペディアで「ネタニヤフ首相」を調べてみると、生まれは確かにイスラエルですが父親のベン・ツィオンはロシア姓をミレイコフスキーといい、一九一〇年に旧ロシア帝国ポーランド領ワルシャワで生まれています。

つまりネタニヤフ首相もロシア系ユダヤ人なのですが、父親と一緒にアメリカに移住し、高校や大学もアメリカで卒業しています。驚いたことにMIT（マサチューセッツ工科大学）の理工学部とMITスローン経営大学院の学位を取得した、とウイキペディアは述べていました。

これはハワード・ジンやノーム・チョムスキーも同じです。彼らもロシア系ユダヤ人ですが、父親と一緒にアメリカに移住し、高校や大学もアメリカで卒業しています。ちなみにチョムスキーは、ペンシルベ

ニア大学で言語学の博士号を取得した後、MITに就職することになりました。

2

いずれにしても、現在のイスラエルを支配している人たちは、有色人種であったはずの古代ユダヤ人とは違って、白色人種のユダヤ人なのです。どうしてこんな不思議なことが起きたのでしょうか。

これが私にとって長い間の謎でした。三井美奈『イスラエル』（新潮新書）や大部なユースタス・マリズ『真のユダヤ史』『カナンの呪い』（成甲書房）なども、この謎を解いてくれませんでした。

しかし調べてみると、現在のユダヤ人は大きく二つに分けることがわかりました。それは「アシケケナジム（アシケケナージ）」と「セファルディム（スファルディ）」と呼ばれ、前者は「東欧系ユダヤ人（白人）」で、後者は「南スペイン・北アフリカ系ユダヤ人（褐色人）」ということになります。

私が1年間カリフォルニア州立大学ハイワード校で日本語を教えていたとき親しくなったエルサ・ガルシア女史（スペイン語教授）が、あるとき「タカ（隆吉）をアシケケナージのバーに連れて行ってあげる」というので、有名なパークレー校の近くの音楽ホールに行ったことがあります。

私は「アシケケナージ」が何を意味するのか分からなかったのですが、行ってみると、そのホールには酒を飲んだりスナックを食べたりしながら、気のあった人たちと踊ったりする空間もあるところでした。音楽も独特で、今から思うとロシア東欧系の音楽だったのです。

私が日本語を教えていた授業に出席していた学生ジム君（白人）によると「エルサ教授はロシア系ユダヤ人だ」とのことでした。そのとき私はジム君がなぜそんなことを私に言ったのか分からなかったのです。



http://www.1s-cat.ne.jp/0123/Jew_ronkou/yudayajin_ronkou.html#2

が、今にして思うと彼はユダヤ人嫌いだからそんなことを私に言ったのかも知れません。

（ちなみにジム君は空手に憧れて沖縄に行き、沖縄空手の3段となり、大学の近くに空手道場を開き繁盛しているとのことでした。そして、その合間に私の日本語教室にも登録して、日本語を忘れないようにしていたのです。）

3

話が少し横に逸れたので元に戻します。

ロシア系ユダヤ人のルーツを調べているうちにシユロモー・サンド『ユダヤ人の起源 歴史はどのように創作されたのか』（WAVE出版）という本があることを発見しました。

この本の著者シユロモー・サンド氏も東欧系ユダヤ人で、オーストリアのリンツで生まれ、両親とともにイスラエルに移住し、イスラエルのテルアビブ大学とバリの社会科学高等研究院で歴史を学びました。

そして一九八四年よりテルアビブ大学にて現代ヨーロッパ

バ史を教えています。そのサンド教授の精緻な研究によれば、東欧系ユダヤ人のルーツはカスピ海沿いに七〇一〇世紀に存在したユダヤ教国家「ハザール王国」にあるというのです。

ハザール王国のルーツはトルコ系遊牧民でしたが、九世紀頃、南からイスラム諸国、西から東ローマ帝国が押し寄せ、イスラム諸国はハザール王に「イスラム教になれ」と迫り、他方、東ローマは「キリスト教になれ」と迫ったそうです。

板挟みになった王は、キリスト教とイスラム教の同じルーツであるユダヤ教を選んで難を逃れ、このハザール王国が後に東欧系ユダヤ人のルーツとなったというのです。しかし、このハザール王国は九六五年にキエフ大公国に攻め込まれて滅亡し、この王国のユダヤ人は国家を失い、離散しました。

4

もし、このサンド教授の説が正しいとすれば、イスラエルのネタニヤフ首相たちが言っている主張は根底から覆ることになります。なぜなら彼らは「旧約聖書に、神がユダヤ人にパレスチナの地を与える」と書かれている」と主張しているからです。

しかし東欧系ユダヤ人のルーツがトルコ系遊牧民だったとすれば、旧約聖書に「神からパレスチナの地を与えられた」と書かれているユダヤ人は、東欧系ユダヤ人とは明らかに異なるものです。

史実としても、パレスチナに成立したダビデ王のユダヤ王国は他のアラブ人と同じ有色人であり白人ではなかったのですから、いまイスラエルの支配者＝東欧系ユダヤ人が旧約聖書を根拠に「パレスチナは神から与えられた土地だ」というのは、全く荒唐無稽な話だということになります。

それはともかく、ハザール王国の王がユダヤ教に改宗したという説明によって、やっとこれまでの謎が氷解したように思いました。ウクライナのゼレンスキー大統領がユダヤ人だということも、これで不自然ではなくまりました。

しかし一步譲って、パレスチナのユダヤ人が離散して、長い流浪の末、ロシアや東欧にたどりついたとしても、旧約聖書を根拠に「パレスチナは神からユダヤ人に与えられた」と主張するのも、荒唐無稽な話です。

旧約聖書は、古事記や日本書紀と同じく、自分たちの民族や国家を正当化するために創り上げられた一種の神話だと考えられるからです。

アメリカに移住した白人たちが先住民（いわゆるアメリカインディアン）の土地を奪い、彼らを殺し尽くしてアメリカという国を建国し、「夢のなかで神が現れ、この地をおまえたちに与える」と言われたから我々にはそのような権利があるのだ、という主張と似ています。

5

私は「なぜアメリカにロシア系ユダヤ人が多いのか」という疑問だけでなく、「なぜユダヤ人は嫌われ差別されてきたのか」という疑問も抱き続けてきました。

が、ここまで書いてきて、彼らが嫌われ差別されてきたのは、彼らにも半分の責任があったのではないかという考えが浮かんできました。

先述のような鼻持ちならない傲慢な「選民思想」を好む人は誰もいないと思うからです。

ネタニヤフ首相の「民族浄化作戦」に代表されるような、「神から選ばれた民だから何をしても許される」という「選民思想」ほど傲慢な考えはありません。これは人種差別の極致であり、「民主主義」と対極にある考え方でしょう。

確かに「自分たちは神から選ばれた優れた民族だ」という神話は、誇りをもたせて民族をまとめる力がありますから、そういう意味では旧約聖書はユダヤ人にとって大きな役割を果たしたことは疑いありません。

古代日本の支配者が古事記や日本書紀を編集しようと思つた動機も、たぶん同じものだったのではないでしょうか。

これは教育心理学でいう「ピグマリオン効果」の一種とも言えるもので、教師から「あなたは優れた才能をもっている」と言われた生徒が、どんどん伸びていくと同時に、逆の効果として、むやみやたらに子どもをほめると実力の伴わないナルシストを育てることになりかねないのと似ているかも知れません。

戦前の天皇制国家が、古事記や日本書紀をもとに、日本は「万世一系の天皇が支配する神の国」という神話を広め、我が国が韓国や中国を支配する権利をもっているという考えを国民に植えつけようとしたのと似ているとも言えます。

いずれにしても、上記のような考えを持つネタニヤフ首相が、七月二四日のアメリカ議会演説したとき、議場総立ちによる58回もの拍手「スタンディングオベーション」を受けたわけですが、これはアメリカという国の倫理観の欠如をも世界中に知らしめることになりました。